【彙報】（平成三十年四月～平成三十一年三月）

◎平成三十年度埼玉大学国語教育学会大会・総会

○平成三十年十二月十五日（土）於埼玉大学

◇卒業論文構想発表会　（学部3年生）

◇修士論文構想発表会　（埼玉大学大学院1年生）

伊娜　笹木規秀　鶴賀久富　濱野天司郎

◇研究発表

大村はま「国語科単元学習」の倫理的背景

新妻　千紘（埼玉大学大学院2年生）

◇ラウンドテーブル

「新学習指導要領を踏まえた授業改善」

本橋　幸康（埼玉大学教育学部准教授）

松下　洋介（埼玉大学教育学部附属小学校教諭）

吉野　竜一（埼玉大学教育学部附属小学校教諭）

◇総会

◎平成三十年度例会

○平成三十一年二月二日（土）於埼玉大学

◇卒業研究発表

「ほめ」の機能に関する一考察

吉田　朱里（埼玉大学4年生）

ＬＩＮＥにおける日本語のフィラー

宮澤　杏実（埼玉大学4年生）

川端康成〈象徴〉と〈幻想〉

―象徴詩派との関係をめぐって―

富岡　隆（埼玉大学4年生）

言語感覚を育成する詩の学習指導の研究

平田　真穂（埼玉大学4年生）

◇研究発表（修論発表）

大村はま「国語科単元学習」の理念型構築の試み

新妻　千紘（埼玉大学大学院2年生）

◇研究奨励賞授賞式

◇国語教育活用ワークショップ

通時コーパス概要説明

小木曽智信（国立国語研究所）

「中納言」講習

服部　紀子（国立国語研究所）

国語教育への応用について（演習）

河内　昭浩（群馬大学）

◎平成三十年度修士論文・卒業論文題目

○修士論文題目

大村はま「国語科単元学習」の理念型構築の試み

新妻　千紘

○卒業論文題目

子どもの手遊びにおける方言の研究

大屋　瑛紀

『吾輩は猫である』における文明批評

杉村　裕一

詩経について

菊池　優実

安部公房『壁』における「壁」の考察

―「S・カルマ氏の犯罪」と「バベルの塔の狸」から見る「壁」のイメージ―

船井　春伽

有島武郎「或る女」　葉子の人物像

児島　彩香

「ほめ」の機能に関する一考察

吉田　朱里

芥川龍之介『邪宗門』未完問題の解―『地獄変』とのプロット連関という視点から―

河原　詩織

ＬＩＮＥにおける日本語のフィラー

宮澤　杏実

本の帯のキャッチコピー　―分類と分析―

長谷川幸希

江戸川乱歩研究

畑　しおり

「やばい」の意味・用法の変化と使用実態について

金子　実鈴

『金閣寺』　―美について―

川村　葵

名づけの多様化傾向とその誘因　村田　一樹
春琴抄について　坂口　舞
萩尾望都研究〜母と娘の確執を通して〜　加藤　鈴菜
応援・激励ソングに関する歌詞分析　土井　美穂
漢字学習と語彙学習に関する研究　田口　雄大
「スカイ・クロラ」シリーズにおける永遠回帰　長谷川実咲
説明的文章の教材研究〜構成の指導を中心に〜　水野　匠
三遊亭円朝『文七元結』の研究　木村　香月
学習意欲を高める中学校古典の学習指導の研究　守重　絢香
色好みの研究　関根　泰葉
森鷗外『雁』―語り手「僕」の真意　渡辺　隆史
玉藻の前伝説の研究　石井　悠馬
『人間失格』における大庭葉蔵の世界の認識　冨山　貴弘
川端康成〈象徴〉と〈幻想〉―象徴詩派との関係をめぐって―　富岡　隆
『日本霊異記』における「夢」と景戒の思想　熊木　千夏
中学校国語科における話し合いを深める学習指導の研究　山田　奈穂
稲垣足穂における前衛とキッチュ　佐藤　花奈
打ち言葉における新しい「〜み」の機能と役割〜twitterを中心に〜　古越　美桜
王維について　野田　晃平
これからの時代に求められる「書く力」の研究　橋本　歩奈
言語感覚を育成する詩の学習指導の研究　平田　真穂
杜甫の詩について　原木　大輔

◎第二十回埼玉大学国語教育学会研究奨励賞受賞論文

「「ほめ」の機能に関する一考察」　吉田　朱里
「LINEにおける日本語のフィラー」　宮澤　杏実
「萩尾望都研究―母と娘の確執を通して―」　加藤　鈴菜
「三遊亭円朝『文七元結』の研究」　木村　香月
「川端康成〈象徴〉と〈幻想〉―象徴詩派との関係をめぐって―」　富岡　隆
「中学校国語科における話し合いを深める学習指導の研究」　山田　奈穂
「言語感覚を育成する詩の学習指導の研究」　平田　真穂

編集後記

『埼玉大学国語教育論叢』第23号をお届けします。本号も国語教育に関連する多様なテーマの論稿を掲載することができました。分業化と形式化がますます進んでいる現代において、国語教育研究における安易な分業化と形式化による弊害もまた、ますます見逃せない状況になっています。応募してきた冒険的な論稿を正しく評価できず、後生に「目には見えない愚か者」（玉井潤野）として揶揄されないためには、本誌もまた、真の意味で学際的な努力を続けていく必要があります。現在、本学会の名称変更の議論が行われているところですが、言語と文化という広い領野における我々の立ち位置を示すものとなるはずです。会員諸氏には、今後とも冒険的かつ刺激的な論考を投稿されますよう、切に希求します。（T）